



"Your Cloud." の 実現に向けて

事後対応型の組織から革新型の組織への変革

ホワイト ペーパー

目次

クラウドへ移行する理由.....	3
クライアント / サーバからクラウドへの移行.....	4
IT 部門を強化するクラウド コンピューティング.....	5
革新の実現	6
クラウド運用モデルの発展に不可欠なクラウド活用能力	7
事後対応型：増大するビジネス ニーズの管理	8
事後対応型の IT からの脱却	9
プロアクティブ型：サービス ブローカーとしての IT	10
革新的なクラウド組織への進化	11
革新型：ビジネスの戦略的パートナー	12
ビジネスの戦略的パートナーになるための VMware の支援	13

クラウドへ移行する理由

今日の企業は、IT を利用して革新への取り組みや競合他社への対策を行います。革新の定義は組織によって異なりますが、共通する要素も多く存在します。たとえば、ビジネス目標を達成するために顧客のさまざまな情報を把握する、主な競合他社よりも優れたサービスを提供する、増加するモバイル ユーザーの生産性と効率性を向上する、などです。IT 部門にとってのさらなる課題は、厳しい予算でこれらすべてを今までより迅速に実現すると同時に、パフォーマンス、ガバナンス、およびセキュリティのサービス レベルをサポートする必要があるという点です。

市場全体を見ると、成功している組織や企業が増加しています。既存および新規の多くの企業にとって、重要な売上機会の創出、新しいビジネスチャンスへの迅速な対応、市場の変革、競合製品の展望の見直しなど、IT 部門がビジネス上の成果を牽引するようになってきました。IT 部門は、コスト センターからビジネスの優れた戦略的パートナーへと進化し、重要なビジネス目標に合わせて明確な価値を提供し差別化を実現してきました。

しかし、同様の成功を収めるために頭を悩ませている IT 部門も存在します。個々に分離している脆弱なインフラストラクチャや時代遅れのシステム管理のアプローチが負担となり、既存システムのサポートだけでも大変な作業となっています。リソースと予算は現状維持のみに費やされるので、IT 部門は、新しいサービスを求める業務部門の対応に常に追われています。このような事後対応型のプロセスを行ってはいは、ビジネスを成長させ、革新的な新しい運用手段をもたらすシステムやサービスに投資することはほぼ不可能です。

また、このような組織では、IT 部門と業務部門との間の緊張がますます高まってしまいます。売上を伸ばし、業務を遂行するためのサービスの提供が常に遅れている状態であると、組織にとっては競争力の面で大きなマイナスとなります。必要な機能を提供する IT 部門の能力に不満を持った業務担当者の多くは、従来の IT 部門の購買チャンネルを利用せずに、IT サービスやビジネス アプリケーションを自身で調達します。また、パブリック クラウドや SaaS プロバイダの魅力的な価格設定やビジネス モデル、また、セルフサービスやオンデマンドでサービスが利用できるというメリットから、これらを利用して迅速に革新することを考えます。

しかし実際には、必要に応じて IT を提供するこの種のアプローチにはリスクがつきものです。このアプローチによって、差し迫ったビジネス上の課題に迅速に対応するソリューションは提供されますが、次に示すような喫緊のリスクや長期的なリスクも伴います。

- 革新的な技術が組織にとって安全であることを、IT 部門が保証できない。セキュリティ、コンプライアンス、およびガバナンスに関する基準はパブリック クラウド プロバイダごとに異なり、多くの場合明確になっていません。IT 部門が主導する堅牢なセキュリティ対策がなければ、機密データが外部に容易に漏えいする可能性があります。
- 革新への取り組みのために実施したさまざまな活動によって、将来複数のテクノロジーが混在した環境になる。別々に実行および管理されるインフラストラクチャ プールを複数作成すると、IT 部門が共通の管理環境を利用して自動化と運用コストの削減を推進することが難しくなります。
- 複数の環境間での可搬性が欠如しているため、IT 部門が、コスト、リスク、およびサービス品質を最適に管理するためにワークロードを移行することができない。これが特に重要となるのは、アプリケーションの規模が拡大し、ビジネスにおいてより戦略的な役割をアプリケーションが果たし、非常に高いサービス レベルが求められる場合です。
- 新しいモデルを採用しなければ、IT 部門は事後対応型のプロセスから抜け出すことができない。既存のシステムをサポートするためにリソースを使い果たしてしまい、重要な新しいビジネス サービスを提供するために必要なリソースを確保できない。

このような状況から脱却するための手段としてクラウド コンピューティングを検討する IT 部門が増えています。その目的は、新しいサービスを導入し、ビジネス バリューを構築する能力に基づいて、業務担当者との新しい協力関係を結ぶことです。クラウドを導入することで、IT 部門は、業務部門に必要なサービスを生み出し、提供する方法を見直すことができます。IT 部門の効率性、信頼性、俊敏性の向上はクラウドによって確実に達成されますが、単にそれだけを目的としているわけではありません。むしろ、IT 部門が今までとは根本的に異なる方法、つまりビジネス ニーズへの柔軟性と即応性を強化した方法で業務を行うことこそが真の目的です。

クライアント / サーバからクラウドへの移行

ビジネスをサポートする新しいサービスを迅速に導入する必要があるため、現在の主流であるクライアント / サーバの概念からクラウドへの移行が促進されています。IT 部門はこの変化の最前線に位置しています。従来の技術や文化にとらわれない新しい企業は、低コストのテクノロジーを迅速に活用して既存の企業に対抗するため、IT 部門はこれまで以上に迅速にサービスを提供しなければなりません。従業員やお客様は、急速に進化している最先端の豊富なデジタルテクノロジーを利用することができるため、IT 部門の能力に対してこれまで以上の期待を持ちます。

VMware のほとんどのお客様にとって、この移行は 3 つのレイヤーの移行で理解することができます。

PC からユーザーへの移行

- エンドユーザーテクノロジー（デバイスとサービス）の革新の促進：セキュリティとガバナンスのポリシーに準拠しながら新しいデバイスとサービスに迅速に対応するには、IT 部門の柔軟性を向上させる必要があります。
- IT 部門にとっての優先課題は、デバイスやアプリケーションを個別に管理およびサポートする方法から、複数のデバイスおよびサービスにおけるユーザーアクセスと SLA を管理する方法への移行です。

アプリケーションからサービスへの移行

- 個々に分離している従来のアプリケーション、ハードウェア、およびソフトウェアを、仮想化を通じて共有クラウドインフラストラクチャに標準化する動きがますます進んでいます。
- 柔軟性に欠ける従来のマニュアルプロセスは自動化され、ポリシーとして定義されるため、効率性が大幅に向上します。
- 新しいソフトウェア定義のサービスを導入すると、IT 部門では動的かつ自動的な拡張が可能になり、セキュリティとガバナンスを維持したままピーク時の需要を満たすことができます。

サーバからクラウドへの移行

- クラウド / サーバ時代の個々に分離したアプリケーションの問題は仮想化によってすでに解決し、これまでは個別に管理されていた数百台または数千台のサーバ全体でコンピューティングリソースをプールできるようになりました。
- IT 部門は、仮想化と管理のテクノロジーを利用して、複数の物理的な場所にプールされたリソースを管理できるため、コストとリソース要件のバランスを柔軟に調整できます。
- 物理インフラストラクチャから Software Defined Datacenter (SDDC) への移行がますます進んでいます。SDDC とは、コンピューティング、ストレージ、ネットワーク、およびセキュリティのインフラストラクチャサービスを仮想ソフトウェアサービスとして再構築するデータセンターモデルです。SDCC は、クラウドに完全に移行するための主要な戦略です。

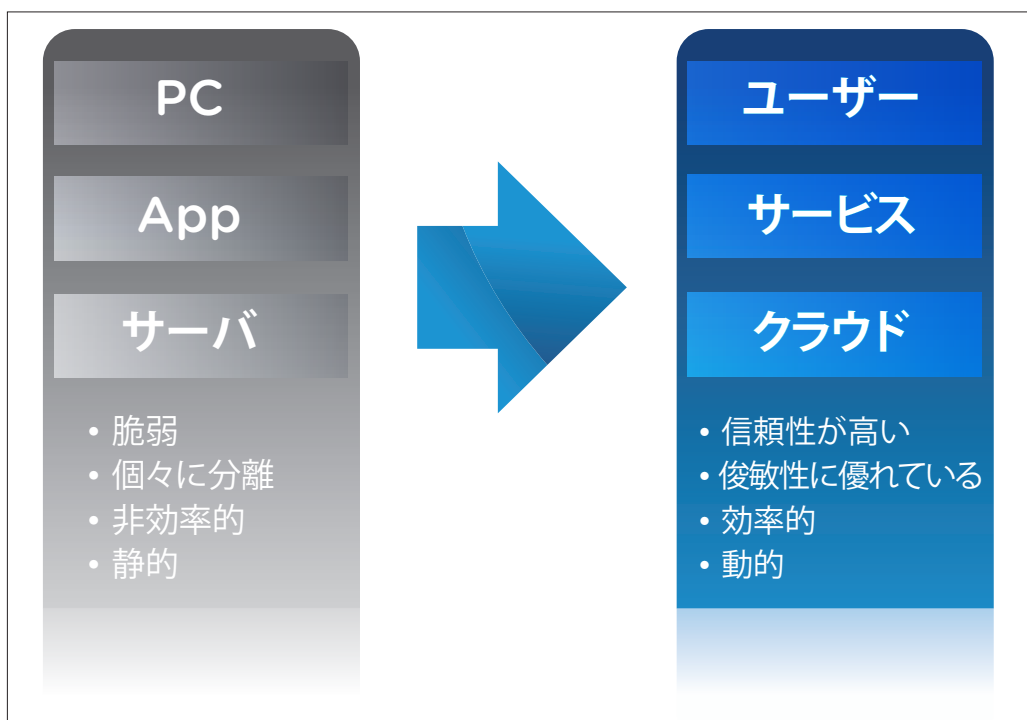


図 1：PC からクラウドへの移行を示す図

IT 部門を強化するクラウドコンピューティング

クラウドの活用已成功している組織は、IT に関する次の 2 つの要素を変更しています。

1. クラウド環境の構築に必要とされる包括的なテクノロジー インフラストラクチャ（サードパーティのリソース、外部のクラウドプロバイダの活用など）。
2. この新しいテクノロジーの基盤のメリットを最大限に利用するために必要とされるプロセス、手法、組織構造、および財務政策を定める、主要な運用モデル。

つまり、これらの組織では、一貫した戦略としてクラウドを利用して、クラウド環境の構築と運用、およびスタッフの配置の方法について調査しています。同時に、クラウドコンピューティングの効率性、俊敏性、信頼性の向上についても継続的に評価しています。

VMware は、数多くのグローバル企業やサービスプロバイダと協力して、クラウドコンピューティングの導入を検討する IT 部門およびその能力のさまざまなパターンを特定してきました。このデータを基に確立されたのがクラウド活用能力モデルです。このモデルを利用すれば、IT 部門は成長および進化の機会を見出し、業務部門にサービスを提供するためのより効果的なモデルを構築することができます。VMware のクラウド活用能力モデルは、IT 部門が既存のシステム、チーム、リソースをより効果的に活用し、同時に外部のクラウド資産やプロバイダを利用してセキュリティ、ガバナンス、およびパフォーマンスに関する IT 基準を満たすための方法を提供します。このホワイトペーパーでは、このモデルに基づいて特定した組織のさまざまなパターンについて詳しく説明します。

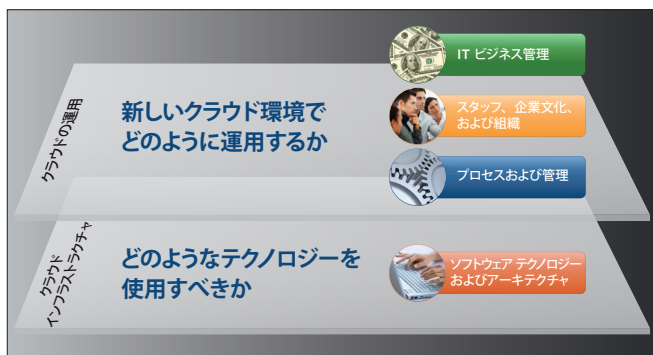


図 2：新しい運用モデルを示す図

運用の 3 つのカテゴリ

事後対応型：既存のシステムを維持し、増え続けるユーザーからの要求に対応するだけで IT 部門がリソースを使い果たしてしまう事後対応型の組織は、ビジネス目標に沿ったサービスを提供できません。クラウドが無計画にビジネスに導入されているため、IT 部門と業務部門の活動がそれぞれ孤立し、セキュリティ、リスク管理、およびコンプライアンスについて規定されている基準から逸脱してしまう危険性があります。新しいサービスの迅速な提供を求める業務担当者は、従来の IT 部門のチャンネルを無視したため、IT 部門と業務部門の間に緊張が生じています。今日の市場では、ほとんどの組織がこの事後対応型の IT モデルで運用しています。

プロアクティブ型：効率性、信頼性、俊敏性を向上し、業務部門が求める新しいサービスの要件を実現するための方法として、IT 部門がクラウドの導入を進めています。プロセスおよび組織の責任が変化することで、クラウドに関する意思決定や方向性についての仕組みが構築され始めています。さらに重要なのは、IT 部門が自身にサービスプロローカーという新しい役割を課している点です。これにより、IT 部門は、外部のクラウドプロバイダを活用して IT 構造の範囲内で迅速な技術革新を実現し、コスト、リスク、サービス品質のバランスを取ることができます。プロアクティブな運用プロセスおよびガバナンスをクラウド環境に適用することによって、IT 部門は、クラウド内の重要度の高いアプリケーションのサポートを強化できます。プロアクティブ型の組織では、クラウドは無計画に購入されたものではなく、広い範囲に大きな影響を及ぼす戦略的な環境として導入されています。

革新型：IT 部門は、クラウドへの投資と、自動化によって解放されたリソースを活用して、業務部門とより直接的に協力して新しいサービスを提供します。クラウドは、IT の提供、従来のシステムから柔軟性に優れたインフラストラクチャへの移行、および完全な自動化を行うための中心となるモデルです。クラウドを導入すると、効率性を向上し、IT リソースを解放して、業務部門にとっての価値を直接向上するための取り組みに重点を置くことが可能になります。革新型の組織では、詳細な評価機能を活用して、クラウドが及ぼす財務上の影響を数値化しています。また、ビジネス目標を達成するための新しいサービスや機能を構築するために、解放されたリソースを投入します。IT 部門は、複数のクラウドソースを管理して、リスク、コスト、およびサービス品質のバランスを取ることで、サービスプロローカー機能を強化します。また、複数のクラウド環境全体を管理できます。

革新の実現

IT におけるその他の世代交代と同様に、クラウドへの移行には新しい戦略が必要です。メインフレームからクライアント / サーバ、そして Web モデルへの進化はすべて、テクノロジーの変化だけでなく、財務、組織、およびプロセスに関する IT の変化を表していました。

クラウド コンピューティングへの移行によって、組織は、柔軟性に優れ、高度に自動化されたテクノロジーを利用できるようになります。この自動化により IT 部門は、組織で広く行われている、時間がかかり、ミスが発生しやすい多くの手作業や手動による管理を廃止することができます。クラウドを導入すると、仮想環境で開始されたポリシー ベースの管理および自動化の手法を進化させ、このようなモデルを複数のリソース プールに拡張できるようになります。また、IT サービスのコストに関する詳細なデータを評価して提供することも可能です。これにより、IT 部門では、コストおよびリソースのモデルを調整する方法をこれまで以上に詳細に確認し、ビジネス上の最大のメリットをもたらす IT の分野に見合った投資を行うことができます。

このプロセスの自動化と財務評価を組み合わせることによって、基本的なタスクに費やすリソースを解放するための優れたモデルが IT 部門に提供されると同時に、リソース割り当ても明確になります。IT 部門は、より効果的に運用コストを管理しながら、解放されたリソースを技術革新に役立てるための戦略的な計画を立てることができます。より詳細な財務情報があれば、IT 部門は IT プロジェクトおよびアプリケーションに適した、費用対効果に最も優れているリソースを配置できます。VMware のソリューションを導入したお客様は、技術革新を促進する新しいサービスに解放したリソースを活用することで、人件費を最大で 25 % 削減しています。結果的に、IT 部門はビジネスを成功に導くパートナーとしての役割を担い、スキルと専門知識を活かして企業の競争力を強化できます。

その結果、IT 部門は、自動化から革新へと発展することができます。自動化と評価の機能を、優れた財務管理機能と組み合わせることによって、効率が大幅に向上し、IT の革新に役立てることができます。



図 3：自動化から革新への発展を示す図

クラウド運用モデルの発展に不可欠なクラウド活用能力

VMware は、世界中で大きな成功を収めている複数の企業やサービスプロバイダと協力して、クラウド コンピューティング戦略を策定および実施しています。このことは、クラウド コンピューティングのメリットを最大限に活用するために組織で実装し、進化させる必要のある一連の主要機能の特定に役立っています。IT 部門が成功を収め、ビジネスの成長に大きく貢献するために必要な機能を次に示します。

- オンデマンド サービス：サービス カタログやセルフサービスポータルを利用してサービス リクエストのフロントエンドを自動化します。**クラウド コンピューティングでは、これまでは実現できなかった新しい IT セルフサービス モデルが導入されるため、効率が大幅に向上します。しかし、IT 部門がセルフサービス モデルに移行する要因はテクノロジーだけではありません。IT 部門は、オンデマンド サービスを成功に導くための主なプロセスを作成およびサポートする方法を認識しておく必要があります。また同時に、業務部門のセルフサービス アクセスをサポートするように、組織を文化的な面から変えていくことも必要です。
- プロビジョニングと展開の自動化：自動化とポリシーを利用してサービスの管理および実施のバックエンドを最適化します。**新しいインフラストラクチャを自動的にプロビジョニングする機能は、オンデマンドの IT モデルを確立し、ビジネス ニーズを満たすために不可欠です。クラウドでは、サービスのプロビジョニング時間を数週間から数時間に短縮することができます。しかし、IT 部門において、この新しいモデルを最大限に活用するプロセスを確立し、財務上の影響を評価するにはどうすればよいでしょうか。また、このアプローチを利用して、新しいアプリケーションやサービスを業務部門に効率的に提供するにはどうすればよいでしょうか。成熟度の高いクラウド環境を導入している組織は、運用、スタッフの配置、および自動プロビジョニングの効果評価に関する高度な知識を身につけて、テクノロジーへの投資を活用しています。
- プロアクティブなインシデントと問題の管理：インテリジェントな分析機能を適用して、イベントを監視およびフィルタリングし、インシデントの自動的な解決と問題の診断を支援します。**クラウド コンピューティングを活用する組織は、従来の管理手法を進化させ、サービスに関する問題が拡大して可用性に悪影響を与える前に、その問題をプロアクティブに診断し対処することができます。そのためには、運用上の新しいベスト プラクティスを採用する必要があります。
- クラウドのセキュリティ、コンプライアンス、およびリスク管理：ポリシーに準拠したアプリケーションと、セキュリティ、監査、およびリスク管理のプロセス自動化をサポートするためのポリシーを標準構成に組み込みます。**組織において、(特にビジネス

クリティカルなアプリケーションに) クラウドを広く導入するうえでの障壁となるのは、セキュリティとコンプライアンスの問題であるという認識は一致しています。クラウドのセキュリティテクノロジーは成熟を続けていますが、組織は、セキュリティおよび管理の確立されたプロセスにクラウドがもたらす影響を理解しておく必要があります。多くの企業は、ワークロードをクラウドに移行する際に、セキュリティとコンプライアンスについて懸念します。このような懸念は、特定のワークロードのセキュリティ要件を評価し、ソフトウェア ベースのセキュリティ機能を利用する新しいモデルを定義することによって軽減できます。セキュリティとコンプライアンスのためのテクノロジーとプロセスについて精通している IT 部門は、従来の IT 環境よりもはるかに安全性の高いモデルを運用していることを認識しています。

- クラウド向けの IT 財務管理 (ITFM)：詳細なコスト配分モデルと実際のサービスの利用量に基づいて IT コストを回収します。これにより、測定とショーバック (コストの提示) / チャージバック (課金) が自動化されます。**クラウド コンピューティングは、まったく新しい実用的な IT モデルを提供します。このモデルでは、IT コストの透明性が強化されており、業務部門に提供する価値に応じたコスト配分を効果的に行うことが可能になります。ソリューションは成熟を続けており、IT 環境に関するより詳細な財務情報を得ることができます。組織はそのデータを利用して、IT 部門が業務部門に提供する価値を高め、両者の関係を強化することができます。組織は、このような財務上の調整を行うことで、コンピューティングのコストをビジネス上の新たな取り組みに正確に関連付け、取引や投資に関する意思決定を促すことができます。IT 財務管理 (ITFM) はオンデマンド サービスを補完する重要な機能です。コストをサービスに関連付けることにより、ユーザーがボタンをクリックすることでリソースをプロビジョニングできる場合に発生する突発的な需要の増大を管理できるよう支援します。

クラウド インフラストラクチャ、運用プロセス、および内部構造を進化させるための投資を行う IT 部門は、IT の運用方法および IT 部門が業務部門に提供する価値において、大きなメリットを期待できます。クラウドの主要機能を進化させることで、IT 運用の効率性と俊敏性が大幅に向上するだけでなく、幅広いワークロードに対応する信頼性に優れた環境を提供することも可能になります。ここで説明した内容は各分野の機能の概要にすぎません。VMware はこれらの主要機能について豊富な専門知識を持っており、戦略的なアドバイスとともにこの専門知識をお客様に提供します。

クラウド機能についての理解を深めたお客様は、事後対応型の組織からプロアクティブ型の組織 (技術革新の出発点) へと変化し、業務部門との協力関係を強化して共通の目標を達成することができます。VMware は、その経験を活かして、大きな成功を収めている組織に共通した特徴を見極め、IT 部門の運用方法およびビジネスにおける IT 部門の役割を進化させるための手順を検討してきました。

事後対応型： 増大するビジネス ニーズの管理

今日の IT 部門の大半は、事後対応型の運用からの移行に頭を悩ませています。柔軟性の低い IT システムや時代遅れのプロセスが原因で、ビジネスを進化させるための新しいサービスやアプリケーションを迅速に提供してほしいというニーズを IT 部門が満たすことができないために、業務担当者との間の緊張はますます高まっています。

大半の事後対応型の組織は、クラウドが無計画に導入されていて、事業部門が外部のプロバイダからインフラストラクチャや開発者向けのサービスおよびアプリケーションを直接調達していることを把握しています。このような動きを大きく後押しするのは市場投入までの期間です。オンデマンド サービスの強みは、革新的なビジネスモデルやセルフサービス環境によって、運用上のメリットをすぐに購入者に提供できる点です。多くの IT 部門は、IT の妥当性と、IT 部門が責任を負うコンプライアンス、リスク管理、およびセキュリティに関する基準の両方にとっての脅威としてこのような外部のプロバイダをみなします。

しかし、そこにはさらに大きなリスクがあります。アプリケーション、データ、リソースが IT サービス モデルの外部にあるので、セキュリティ、パフォーマンス、信頼性、およびガバナンスは保証されません。パブリック クラウドや SaaS（サービスとしてのソフトウェア）プロバイダは、さまざまなインフラストラクチャ環境、ポリシー、基準を提供しています。しかしこれらは、収益と業務に重要な機密データ、知的財産、およびサービスにとってリスクとなる可能性があります。また、多くの場合、このような無計画な投資は、将来的に環境の分離を引き起こします。ベンダー間で一貫性のないプラットフォーム、まとまりのない管理環境、および複数のコストセンターへのコストの分散によって、IT 部門が自動化、共通の管理プラットフォーム、財務計画を通じて効率的に管理できなくなる危険性があります。

このような状況下において、収益を生み出すアプリケーションや主要なビジネス アプリケーションをクラウド内で実行することを選択する組織もあります。しかし、このような組織では、エンタープライズ レベルの SLA を満たす厳格なディザスタ リカバリ、セキュリティ、コンプライアンスのプロセスおよび機能を導入するまで、テスト、開発、および一時的なアプリケーションの利用にのみクラウド環境を制限します。

IT 部門がこの事後対応型の運用から脱却するには、クラウド経由で IT サービスを活用する方法について、ある程度のルールを決めなければなりません。組織にとってより優れたクラウド プロバイダとして機能するために、通常、IT 部門はコア インフラストラクチャテクノロジーだけでなく、主要な運用プロセスの変革も行います。主なマイルストーンとなるのは、IT 部門の効率性を向上し、アプリケーションのテストおよび開発環境の迅速なプロビジョニングに役立つセルフサービス環境の構築です。また、IT 部門は、サードパーティ リソースの利用方法についても理解しておく必要があります。これには、SaaS アプリケーションのプロビジョニングや管理のための統合モデルの策定も含まれます。IT 部門がセルフサービス環境のメリットを活用するには、サードパーティのインフラストラクチャプロバイダの利用を阻止し、セルフサービス環境の構築だけでなく、セルフサービス モデルの運用と管理に関するベスト プラクティスについても組織内の関係者のために理解しなければなりません。

事後対応型の運用から脱却できる組織は、ビジネス ニーズに迅速に対応し、適切なタイミングで新しいサービスを提供するには何が必要であるかを理解しています。限られた 1 つのニーズのみに対応するクラウドに無計画な投資をしても、IT を将来発展させるために必要な標準のアーキテクチャとモデルを実現するための包括的な戦略が欠けています。IT 部門は計画的な投資により、そのような状況からの脱却を図ります。クラウドの強力なビジネス プランを作成し、クラウド サービスの構築、提供、評価、およびスタッフの配置の方法を定義する標準のインフラストラクチャ モデルの確立を開始することにより、将来的なクラウド投資の基盤が構築され、IT 部門が業務においてより戦略的な新しい役割を果たすための準備をすることが可能になります。

事後対応型の IT からの脱却

IT 部門が事後対応型の運用モデルから脱却するには、IT 部門が利用する、基盤となるテクノロジーや運用方法を再定義するための具体的な手順を実行する必要があります。この段階で、既存のクラウド環境を安定させる投資を行う必要があります。また、今後分離された環境を構築することで、ビジネスにリスクをもたらさない方法で迅速に革新できるように、努力する必要があります。

必要な手順は次のとおりです。

- IT コストを詳細に確認し、ショーバック（コストの提示） / チャージバック（課金）など、成熟度の高い財務モデルの基盤を構築する
- ビジネスに影響を与えるパブリック クラウド サービスとプライベート クラウド サービスを含めるようにサービス カタログを強化する
- セルフサービスを実現してリクエスト管理リソースを解放する
- クラウド間での標準的なサービスのプロビジョニングや展開、新しいサービスの開発やリリースのプロセスなど、自動化の主要プロセスを特定する
- 複数のクラウド全体をプロアクティブに管理し、視認性を確保するために、さまざまなクラウド管理ツールを採用する
- インテリジェントな分析機能を適用して、イベントを監視およびフィルタリングし、プロアクティブなインシデントの解決と問題の診断を支援する

プロアクティブ型： サービス ブローカーとしての IT

クラウドへの無計画な投資をやめて、一貫した IT 戦略の一部として投資を行うと、組織ではよりプロアクティブな運用を想定することが可能になります。セルフサービス モデルへの早い段階での投資や自動化への新しい投資によって、引き続き IT リソースを解放できます。解放されたリソースは将来の技術革新や変革に再利用できます。通常、プロアクティブ型の運用を行う組織では、IT システムからコストや財務に関するデータを取得し、IT 全体の運用コストについて詳細に理解することができます。また、評価のメカニズムとして業界および同業者のベンチマーク評価の使用を開始しています。

プロアクティブ型の組織は、クラウドに関する個々の意思決定（外部のクラウド ソースやサービスの選択など）を、長期的な目標に向けた共通の重要な戦略に結びつけることができます。組織の幅広い IT 戦略に応じた意思決定を行うことにより、外部のプロバイダに関連するコストの視認性が向上します。この視認性の向上は、効率性の強化、およびビジネスを成長させ差別化を図るリソースへの再投資が可能なコストの管理についても同様に実現します。

このモデルに基づいて運用する IT 部門の進化はテクノロジーだけにとどまりません。また、関連するプロセスや組織構造も進化を遂げており、長期的な IT 戦略およびビジネス ビジョンのための主要な要素としてクラウドを支持しています。インフラストラクチャと運用に投資した結果、プロアクティブ型の組織は、ビジネスに影響を与える重要度の高いアプリケーションをクラウド内でサポートできます。また、高い信頼性により、主要な SLA に対応できます。これは、テスト、開発、および一時的なアプリケーションの利用にとどまらず、クラウド コンピューティングを普及させていくための重要なステップです。セキュリティ、コンプライアンス、およびガバナンスの手法とともに、クラウド レベルのディザスタ リカバリをサポートするインフラストラクチャとプロセスを確立することで、IT 部門のクラウド モデルを利用して、収益と顧客関係につながるアプリケーションを実行することができます。また、ビジネスに影響を与えるさまざまなアプリケーションを IT 部門のクラウド環境に組み込むことにより、自動化および共通の管理モデルが実現し、運用コストを大幅に削減できます。

お客様の多くは、クラウド インフラストラクチャ運用の CoE（中核的拠点）を利用してクラウド戦略を促進しています。このチームは、クラウドに関する独自の専門知識と IT 部門内の業界に関する専門知識をまとめて、ビジネスに重点を置いたスマートなアーキテクチャの構築と、クラウド インフラストラクチャに関する意思決定を支援します。クラウド インフラストラクチャ運用の CoE は、進化に必要なとされる主なプロセスおよび主なテクノロジーへの投資を評価して、戦略に沿ったクラウドの推進を実現します。クラウド インフラストラクチャ運用の CoE は、組織が実際に進化し、IT の包括的なクラウド ビジョンに近づくために重要な役割を果たします。

この高度な機能をサポートするもう 1 つの取り組みはクラウド テナントの運用です。クラウド テナントの運用は、戦略的に調整された方法でクラウド サービスを管理、開発、および提供するために重要であり、サービスのガバナンスおよびライフサイクルの管理、サービスの設計および開発の管理、サービスの運用、プロビジョニングの管理、およびコンシューマの管理が含まれています。クラウド テナントの運用では、社内システム（プライベート クラウド）、クラウド プロバイダが管理する外部クラウド、またはハイブリッドクラウド（プライベートとパブリック クラウドの組み合わせ）に展開可能なサービスを定義して提供します。これにより、理想的なサービス指向のビジネスが実現します。

サービス ブローカーとしての IT が及ぼす影響

プロアクティブ型の組織における最も大きな変化の 1 つは、IT 部門がサービス ブローカーとしての役割を担うことができる点です。IT サービス ブローカーは、複数のクラウド ソース（外部のプロバイダが提供するクラウド ソースを含む）を戦略的に管理し、特定のアプリケーションやサービスに固有のニーズに応じたリソースを配置できます。IT サービスのリクエストがあった場合、IT 部門は、それぞれのアプリケーションやサービスで必要とされるコスト、リスク、およびサービス品質の基準に基づいて、各リクエストを調整できます。

たとえば、ある事業部門では、少数の顧客に試験的に導入する新しいサービスを開発するためのリソースが必要な場合があります。パフォーマンス、セキュリティ、拡張に関する要件は比較的少なめです。しかし、テストとさらなる開発を進め、先行者利益を獲得するために、アプリケーションを迅速に展開する必要があります。担当チームは、テスト グループにおけるアプリケーションの利用に問題がなければ、拡張性と安全性に優れた環境にリビジョンを限定してアプリケーションを移行できるようにしたいと考えています。このような要件を基に、IT 部門は自身のポートフォリオにおける最適なリソースをニーズに応じて提供できます。

もう 1 つのシナリオは、顧客や取引に関する機密データが保存されている既存の財務システムのアップデートです。このシナリオの場合の要件は先程とはまったく異なります。セキュリティに優れた環境にデータを保存し、コンプライアンスに関する厳格な基準に対応している必要があります。ここでも、IT 部門は、リスク管理に関する厳しい基準に対応したクラウド リソースをこのリクエストのニーズに応じて提供し、特定のサービス ニーズを考慮すれば必要なコストについても納得させることができることを理解しています。

サービス ブローカーの役割を果たすことは、組織内のクラウドに加え、サードパーティ プロバイダのクラウド サービスを採用し、技術革新を実現する手段としてその両方を活用するうえで不可欠なステップです。IT 部門は、サービス ブローカーとして、業務担当者が承認されたサードパーティ サプライヤを活用し、すべての IT リソースが共通の管理機能および自動化機能を最大限に活用できるようにすることが可能です。

しかし、さらに重要なのは、サービス ブローカーとしての役割を果たすことで、ビジネスの変革を促す IT の役割が強化される点です。オンデマンド インフラストラクチャから SaaS アプリケーションや開発者向けの環境まで幅広いサービスを仲介することにより、IT 部門は、サービスの構築、展開、および利用においてビジネスの俊敏性を向上します。IT 部門がビジネスの戦略的パートナーとしての地位を確立するうえで、サービス ブローカーとしての役割が時間の経過とともにますます重要になります。

革新的なクラウド組織への進化

プロアクティブ型の組織の特徴は、幅広いビジネス サービスの提供、サービス レベルの向上、クラウドへの計画的な投資、および長期的にビジネスを支援するためのクラウドの包括的戦略を推進する能力によって定義されます。IT の財務面についてより詳細に理解することで、クラウドを無計画な投資から戦略的な IT モデルへと変化させることが可能になります。IT の財務面について理解するには、業界および同業者のベンチマーク評価を利用して、クラウド時代に対応した明確なプロセスと組織的変更を実施する必要があります。サービス プローカーの役割を担う IT 部門は、ビジネス アドバイザーとなり、さまざまな機能にわたるビジネス要件を主要な IT サービスに関連付けます。

IT 部門がさらに成熟し、ビジネスの変革を促す能力を高めるには、IT 部門の運用方法や活用するテクノロジーを再定義する具体的な手順を実行する必要があります。このレベルにおける投資では、これまでの決定が展開し、一定の形になります。また、次に示す方法によって、幅広い使用状況に対応する標準の運用環境としてクラウドを位置づけることができます。

- 詳細な財務データを活用して、さまざまなサービスや調達オプションを比較検討し、コスト、サービス品質、およびリスクの間の妥協点について業務部門と協議する
- 調整済みのスコアカードを基に IT パフォーマンスを管理し、効率性、俊敏性、および信頼性のメトリックについて調査した業界および同業者のベンチマークと比較する
- クラウド インフラストラクチャ運用の CoE の範囲を拡大し、IT インフラストラクチャの管理範囲を広げる
- クラウド テナントの運用の役割を拡大し、社内に配置されるプライベート クラウドが提供する SaaS アプリケーションと外部のクラウド プロバイダが提供する SaaS アプリケーションを組み合わせることで、最良のビジネス サービスを提供する
- ビジネス クリティカルなサービスを含めるようにサービス カタログを拡張する
- 自動化の強化およびすべてのクラウド運用プロセスの統合を通じて、継続的な改善を促進する
- 予測に基づく運用および自動化されたポリシー ベースの修正を実現する
- 社内と外部のクラウド全体におけるシームレスな運用管理をサポートするよう、異なる種類のクラウド管理環境を拡張することで、コスト、サービス品質、およびリスクに基づき、最適な「任意の時点」のクラウド ソースに対する優れた視認性を提供する

革新型：ビジネスの戦略的パートナー

自動化および最適化への投資を継続することで、IT 部門の役割はサービス プロローカーへと進化し、詳細な財務分析とベンチマーク評価を行うことができるようになりました。IT 部門は、ビジネス目標の達成に必要な技術革新を推進する、戦略的な役割を果たしています。

革新型の組織は、運用基盤をさらに成熟させてハイブリッド環境の統合管理を実現し、多様なインフラストラクチャ全体でリソースのプロビジョニングと管理を強化しています。自動化機能と詳細な分析機能を広範囲に導入し、サービスの問題や中断を予測して回避します。ビジネス ユーザーの観点では、基盤となるテクノロジーおよびリソースの物理的な場所は問題ではなくなり、IT 部門と業務部門の話し合いの内容は、インフラストラクチャではなくサービスタイプやサービス レベルへと変化します。

組織的には、クラウドが IT モデルの主流になると、クラウド インフラストラクチャ運用の CoE やクラウド テナントの運用などのチームや組織の対象範囲が、さまざまな意思決定や戦略の管理にまで拡大します。クラウド環境の運用方法に関するスキル開発に投資することで、クラウドの専門知識およびサービス指向の考え方が取り入れられて、IT 部門の文化が明確になってきます。

しかし、革新型の組織にとっての最も大きな変化は、全体的なビジネス戦略に貢献するチームの能力です。このタイプの組織は、財務評価とベンチマーク評価をビジネス上の特定の意思決定により効果的に関連付けることができます。また、単に現在の運用を維持するだけではなく、自動化によってより多くのリソースを解放し、ビジネスを成長させる取り組みに着手できます。革新的な組織を最も特徴づけるのは、ビジネスへのプラスの効果に基づいて戦略的な意思決定を行う能力です。クラウド リソース（外部の複数のプロバイダが提供するリソースを含む）を効果的に管理することで、IT 部門は、単にさまざまなビジネス ニーズに対応するだけでなく、有利な立場で率先してビジネスの戦略的方向性に貢献できます。つまり、IT 部門はビジネスに可能性をもたらし、場合によっては、実際にビジネスを動かすことも可能です。このような能力は、ビジネス上の意思決定だけでなくビジネスの成功という点においても、パートナーとしての IT 部門の役割を確立するうえで不可欠です。

ビジネスの戦略的パートナーになるための VMware の支援

VMware のソリューションは、世界中の最大規模の優れたクラウド環境の共通の要素となっています。VMware のソリューションは、プライベート クラウドの実装に利用されています。また、VMware のテクノロジーを利用して、複数のクラウド間で標準化されたインフラストラクチャを構築する、パブリック クラウド サービス プロバイダのグローバル ネットワークもあります。VMware はこれらの組織と協力して、IT 部門がクラウド インフラストラクチャだけでなく、クラウドの運用をも進化させて、業界が進める変革を最大限に利用する方法について独自の情報を入手しています。

成功を収めている VMware のお客様は、クラウド コンピューティングを活用して、新しいサービスを提供し、新しい市場に参入して、顧客のさまざまな情報を把握し、増加するモバイル ユーザーや要求の厳しい従業員の生産性を向上しています。VMware は、この専門知識を活かして、成功を収めているこれらの組織の成果を幅広い市場に拡充できるよう支援します。

VMware のクラウド ソリューションは、IT の効率性、俊敏性、信頼性を向上し、革新への取り組みを支援します。また、クラウドの構築、運用、管理、およびスタッフの配置に必要なテクノロジー、サービス、支援を合わせて提供することによって、組織がクラウド コンピューティングのメリットを最大限に活用できるようにします。VMware のクラウド ソリューションの技術的な基盤である VMware vCloud Suite® は、業界初の完全に統合されたクラウド インフラストラクチャ スイートであり、Software-Defined Datacenter の基盤を提供するプラットフォームです。vCloud Suite は、IT の運用を大幅に簡素化し、すべてのアプリケーションに最適な SLA (サービス レベル アグリーメント) を実現します。

VMware のクラウド ソリューションの運用および組織の基盤となるのは、VMware がこれまでお客様とクラウドの移行を進める過程で培ってきた豊富な経験をベースとする、実績のある教育、認定、および実装のサービスとアドバイスです。

VMware のクラウド運用サービスは、運用プロセスと組織構造を変革するための情報、重点的な推奨事項、およびエキスパートによる支援を提供し、クラウドの価値を最大限に高める財務モデルを適用します。VMware とそのパートナー体系が提供するサービスは、組織内で不可欠な機能をお客様が開発できるよう支援します。

- **オンデマンド サービス：** IT コストを削減し、俊敏性を向上するための新しいセルフサービス モデルを実装します。
- **プロビジョニングと展開の自動化：** かつてない効率性を実現するために、要求への対応、アプリケーションの開発、および展開のプロセスを進化させます。
- **プロアクティブなインシデントと問題の管理：** 自動化とポリシーベースの管理を活用して、ミスが発生しやすい手動プロセスを排除し、問題が発生する前にシステムをプロアクティブに管理します。
- **セキュリティ、コンプライアンス、およびリスク管理：** クラウド環境全体にわたるシステムの保護に関するエンタープライズ レベルの基準を確保し、ビジネスを保護します。
- **クラウド向けの IT 財務管理：** 透明性を提供し、IT サービスのコストをその需要および利用に直接関連付ける財務の新しい枠組みに移行します。

柔軟性を備えたクラウド運用サービスでは、プロセス、スタッフ、およびサポート用の管理ツールの統合に対応するさまざまな機能分野にわたるクラウド運用の分析、設計、および実装を支援します。



ヴァイムウェア株式会社 〒105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5 浜松町スクエア 13F www.vmware.com/jp

Copyright © 2012 VMware, Inc. All rights reserved. 本製品は、米国および国際的な著作権法および知的財産法によって保護されています。VMware の製品は、<http://www.vmware.com/go/patents> のリストに表示されている 1 つまたは複数の特許の対象です。VMware は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。他のすべての名称ならびに製品についての商標は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。アイテム No. : 83476_v1_Corp Whitepaper